

翻訳語「蒸気」の形成についての試論

阿 川 修 三

About the formation of a translation of 蒸気 (jōki)

Shuzo Agawa

蒸気 (jōki) is the Japanese translation made by 蘭学者 (Scholars of Dutch learning) in the 19th century. It spread from the birth, and formation process until established and was considered in this thesis according to material in 蘭学書 (Dutch learning books) and 蘭和辞書 (Dutch-Japanese dictionary). It was considered whether 英華字典 (missionaries' English-Chinese dictionaries) and 漢訳洋書 (foreign books translated into Chinese) had influenced the formation of the translated word 蒸気 (jōki) and confirmed that it was unrelated in any way.

1. はじめに

筆者は本稿で、「オランダ語stoom、damp、英語damp、steam、vapor」の訳語「蒸気」が日本で誕生し、定着した過程を考察する。併せて、その「蒸気」が、来華宣教師が編纂した英華辞書、彼らが翻訳した漢訳洋書とは如何なる関係にあるかをも考察したい。

そこで、まず「蒸気」が西洋近代科学を日本が受容する際に生まれた訳語、即ち近代訳語であることを述べ、それから、「蒸気」という訳語の日本における形成過程を、蘭和辞書、英和辞書及び蘭学書、洋学書の用例により見ていきたい。

さて、今日、「蒸気」という語は、主に、①物質の気体の状態。液体または固体から蒸発または昇華によって発生した気体、②すいじょうき（水蒸気＝水が蒸発してできた気体）の略¹として使われている。「蒸気」は漢語であるからというだけでなく、①の場合も、②の場合も言葉として硬い表現であり、一般に理科用語として使われる。特に①は理科用語として、論文、専門書で使われるのが一般的である。②の意味を表す語には、他にゆげ（湯気）やきり（霧）、かすみ（霞）、もや（靄）などがあるが、これらの語では表現不可能な場合、すなわち気象、化学のテクニカルターム（専門用語）として使われることが多い。

更にこの語は、現在最新で最大規模の国語辞典である『日本国語大辞典第二版』（小学館、2000～2002年）で、その用例を遡ってみると、杉田玄白の『形影夜話』上編（1810年）に見えるのが上限である²。すなわち19世紀の初めあたりにしか遡ることができないのである。そもそも、この杉田玄白が使用した「蒸気」は、オランダ語「オイトワーセミング（uitwaseming＝本来蒸発の意味で、ここでは発汗を指す）」³の訳語で、蒸発するもの（＝蒸気）を指している。

以上のことは何を意味するか。つまり、「蒸気」は西洋の科学、技術を日本で受容する際に誕生した訳語（＝近代訳語）ではないかということである。以前から「蒸気」の用例を筆者は中国語や日本語の文献に求めてきたが、18世紀以前にその用例を求められなかったのも、既に述べたように「蒸気」が西洋科学、特に物理（気象）、化学の翻訳語であることと関係があらう¹。

ところで、「蒸気」は漢語であるが、この翻訳語と考えられる「蒸気」は翻訳の際に新たに作られた語ではない。「蒸気」は翻訳語として、上述の①、②の意味を付与されたが、それ以前から漢語として「蒸気」は存在した。諸橋徹次編『大漢和辞典』（大修館書店、1989～1990年）、

『漢語大詞典』（上海辞書出版社、1986～1994年）の「蒸気」の項⁵をみると、「蒸気」の典拠として、いずれも『淮南子』『主術訓』の「是故草木之発若蒸気、禽獸之帰若流泉、飛鳥之帰若煙雲」の「蒸気」が挙げられている。ただし、この「蒸気」は「気のおつまる」、「気のものぼる」⁶ことを意味しており、この「気」も、今日の「蒸気」の「気」が意味する「気体」ではなく、中国の古来から存在する概念で、「一般にエネルギーをもつ流動体で、状況に応じて運動し、何らかの作用を営むもの」（「気」【『中国思想文化事典』東京大学出版会、2001年】）である。今日使われている「蒸気」という語、すなわち、日本語としての「蒸気」は、漢語としての「蒸気」と、イメージにおいて近似性を有するが、意味においては些か隔たりがあることがわかる。以上のことから、日本語である「蒸気」は、西洋の気象学（物理）、化学を日本に導入する際に、それ以前から存在していた、中国語「蒸気」を借用した翻訳語であると考えられる。

これから、日本語文献の「蒸気」の用例を18世紀末以降に成立した、蘭和辞書、英和辞書や蘭学書、洋学書から示し、近代訳語「蒸気」の形成過程を明らかにするつもりである。そして、併せて、このような蘭学者、洋学者の翻訳活動に、19世紀初頭から始まった、来華宣教師たちの編纂になる、英華・華英辞書や漢訳洋書（筆者注：西洋人が漢文で書いた地理書、科学啓蒙書などを指す）が影響を与えたか否かをも考察する。

2. 日本における「蒸気」の誕生と定着

既に述べたように、現在管見の限り、日本語「蒸気」の最初の用例は、杉田玄白の『形影夜話』（1810年）上篇に見える。この書物は医学啓蒙を旨とし、玄白の晩年、養嗣子伯元が出版したものである。ここでの「蒸気」は「又風寒暑湿の気に傷らるれば、常に腠理汗孔（筆者注：

皮膚や汗の出る穴)より発泄する蒸気、彼語にて『オイトワアツセミング』といふもの、皮裏に留滞して外洩する能わず⁷とあることから、体内の液体(水分を主とする)が蒸発し気化したもので、オランダ語の『オイトワアツセミング (uitwaseming)』の訳語である。筆者が既に述べたように、この用例は今日使われている「蒸気」の「①物質の気体の状態。液体または固体から蒸発または昇華によって発生した気体」の訳語として誕生している。他の既存の日本語、ゆげなどでは置き換えることが不可能であったため、漢語「蒸気」が新たな意味を付与され、借用されたのではないだろうか。なお、明末清初の来華宣教師の残した科学系の漢訳洋書には「蒸気」はない。

では、玄白はどのように訳語を選定したのか。玄白の『解体新書』「凡例」で述べる「翻訳の方法」によって見ていきたい。

訳に三等あり。一に曰く翻訳、二に曰く義訳、三に曰く直訳。

(『解体新書』「凡例」【『洋学 下』日本思想大系64、第322頁、岩波書店、1972年】)

即ち、玄白は翻訳の方法には三通り、即ち「翻訳」、「義訳」、「直訳」があると言う。「翻訳」とは一対一の対応ある正格な漢字(中国古典に典拠のあるもの)をあてること、「義訳」とは意識のことで、意味を取って、適切な漢語をあて、結果として漢語の創作になる。「直訳」は音訳のことで、原語を漢字音で音訳することである。(杉本つとむ訳・著『知の冒険者たち——『蘭学事始』を読む』【八坂書房、1994年】第199、200頁)この分類でいけば、「蒸気」は正しくここで言う「翻訳」による訳語である。蘭学者は漢学の基礎も有しており、玄白も青年期に荻生徂徠の高弟服部南郭の弟子、宮瀬龍門に就き漢学を学んでいる。当時、漢籍に典拠のある語から訳語の候補を探すことは訳語選定の主要な方法であった。

それでは、玄白が『淮南子』を典拠とする「蒸気」を『オイトワアツセミング (uitwaseming)』の訳語にどのようにして選んだのか。この点は次のことから容易に想像できよう。当時一般に、蘭学者も漢学の素養から、その宇宙観には中国の伝統思想、就中、気其自然哲学が浸透しており、訳語「蒸気」の典拠となる『淮南子』は、気の哲学の重要な文献であった⁸。玄白が『形影夜話』を著した頃には、『淮南子』は鶴飼信之(石齋)が訓点を施した和刻本、『淮南鴻烈解二十一卷』(漢 高誘注 明 茅坤評 寛文四年【1644年】刊)が通行しており⁹、『淮南子』は容易に見ることができた。玄白が『淮南子』にある「蒸気」の語に出会うことはさほど難くないのである。

さて、これまで、「蒸気」は玄白の作った訳語であるということを前提に「蒸気」の誕生を論じてきたが、それには、『形影夜話』に少し遅れて、「蒸気」が登場する、英和对訳分類単語集・会話集である『諳厄利亞興学小筌』(1811年)、英和辞典『諳厄利亞語林大成』(1814年)との関係についても述べておく必要がある。

この当時、フェートン号事件後、英国船等の相次ぐ来航に驚いた幕府は、その対策として本木正栄ら蘭通詞に英語の学習を命じた。彼ら蘭通詞はその中で、英和对訳分類単語集と会話集からなる『諳厄利亞興学小筌』をまず1811年に完成させ、続いて、幕命により日本初の本格的英和辞典『諳厄利亞語林大成』を編纂し、それぞれ幕府に上納した。これらの書物には「蒸気」が訳語として登場する。

まず、玄白の「蒸気」の用例の一年後に完成した、大通詞本木正栄編纂の『諳厄利亞興学小筌』(1811年)には、その分類単語集の「乾坤部(自然に関する単語を集めた部分)」の気象に関する語を集めたところに、「mist 霧^{カスミ}」、「vapour 霧」などと並んで「exhalation」の訳語として「蒸気」がある¹⁰。本来「exhalation」は「(息・ため息・蒸気などを)吐き

出すこと、放出、発散、蒸発、「吐き出されるもの、呼気、放出物」を意味し、気象に関する語とは言えないが、訳語「蒸気」は水面や海面から蒸発した気体（＝水蒸気）を意味する語として、この場所に置かれたものと考えられる。水蒸気の意味の「蒸気」としては、初出であろうが、「exhalation」は本来の訳語としては誤訳とまで言えないにしても、適切な訳とは言えない。

次に大通詞本木正栄を中心に植林高美、吉雄永保も執筆し、馬場為八郎、末永甚左衛門の協力を得て編纂された、英和辞書『諳厄利亞語林大成』には、「exhalation」と「vapour」の訳語にそれぞれ「蒸気」がある¹⁾。前者は『諳厄利亞興学小筈』の訳語の継承であるが、後者は『諳厄利亞興学小筈』の「蒸気」とは違い、「vapour」（＝霧、かすみ、湯気、煙霧など）の正確な訳語として登場した。

ここで、この二冊の書物がどのような関係にあるのかを、渡辺実「英語習学の方法と論理——『諳厄利亞語林大成』の誕生まで」（『長崎原本「諳厄利亞興学小筈」「諳厄利亞語林大成」研究と解説』、大修館書店、1982年）によって考えていきたい。

即ち、渡辺論文に拠れば両書の関係は次のように想定される。『諳厄利亞興学小筈』はその序に言うごとく、本木正栄の父、良永が蘭人から書き写しておいた「オランダの学語を集成した書」、即ち「一傍に和蘭語、一傍に諳厄利亞語」が対照された、英蘭対訳語学入門書から「解し易き類語を抄出し」た抄訳本で、文化八年春（1811年）に完成した。同年九月に幕府の英和辞書編纂の命を受け、『諳厄利亞語林大成』の編纂に取りかかった。『諳厄利亞語林大成』は『諳厄利亞興学小筈』の元になった、その英蘭対訳語学入門書に現れた英単語をもれなく拾い、アルファベット順に配列して辞書として編集し、翌文化九年五月（1812年）に草稿が完成し、その二年後の文化十一年六月（1814年）に浄書本が完

成したのである。

さて、ここまでこの英和の二書について、その来歴、「蒸気」の用例等について述べてきたが、「蒸気」の語史において重要な問題、即ちこれらの書物の「蒸気」が杉田玄白の訳語の継承なのか、それとも、父本木良永または子本木正栄の作りだした訳語なのかをこれから考えていきたい。

この問題を論ずるに当たって、『語厄利亜語林大成』草稿本の「exhalation」の項の書き込みが大いに参考になろう。草稿本には浄書本（幕府へ上納したもの）ではなくなっているオランダ語が英語の後に朱で書き込まれているが、この「exhalation」の項にはオランダ語の「uitwaseming」がその後に朱で書き込まれている。このことから、『興学小筈』、『語林大成』の藍本である英蘭対訳語学入門書には英語「exhalation」のオランダ語の訳語として「uitwaseming」があったことがわかる。であるならば、次のように考えられまいか。『興学小筈』の「exhalation」の訳語「蒸気」はオランダ語「uitwaseming」に対する訳語であり、杉田玄白の『形影夜話』に載る「uitwaseming」の訳語として、「蒸気」を借用し、借用であるために本木正栄は既に述べたような誤訳に似たことをしてしまった。「蒸気」が自家薬籠中のものであれば、このようなことはあり得ないであろう。『語林大成』の完成までに、勉強家で抜群の語学力を有した正栄はその誤りを正し、新たに「vapour」の訳語に「蒸気」を選定したのではなかろうか。正栄が当時功成名を遂げた蘭学者杉田玄白の著した『形影夜話』を読み、訳語選定に苦心惨憺していた折、この「蒸気」を「uitwaseming」の訳語として採用したことは十分に考えられることである。以上のことから、筆者は現在のところ、訳語「蒸気」は杉田玄白によって作られたとするのが妥当であると考え。

とは言え、『諳厄利亜語林大成』草稿本の「vapour」の傍らにあるオランダ語「rook damp」から、湯気、水蒸気の意味として「蒸気」と訳したのは、正栄乃至編纂に参加した通詞の手柄である。

上記の両書は、日本における英和辞書の嚆矢ではあるが、幕府の秘本として長い間秘蔵され公開されることがなかったため、その存在が長い間一般に知られていなかった。しかし、それらの草稿本は本木家に蔵され、『諳厄利亜語林大成』には正栄の他にも多くの蘭通詞が編纂に携わっていたのである¹²から、その訳語はこの辞書編纂に関係した通詞を通して継承され共有されたと見てよいのではなかろうか。

次に「蒸気」が登場するのは、フランス人シュメルの『日用百科事典』のオランダ語重訳版の翻訳書『厚生新編』（1811～46年）である。その「21 蒸湯 バット」又「ストーフ」の項に見える。

第四は蒸気蒸法「ダンプストーフ」和蘭「パルネウム・ハポラリウム」^{ラテン}羅甸 此法は少しく温暖気を与ふる迄なり。即ち硝子器に物を入れ、温湯の蒸気に因て温暖にするなり¹³

ここでは、「蒸気」は水蒸気の意味で用いられている。

この項は同書翻刻書の杉本つとむ「項目別翻訳文と訳稿収録箇所一覧」等¹⁴によれば、訳校者は大槻玄沢、宇田川玄真であり、文化11年（1814年）には完成している。この「蒸気」は玄沢、玄真の創作ではなく、既に述べた英和辞書からの継承と考えたほうが自然であろう。なぜなら、玄沢は本木永良に師事し、その子であり、『諳厄利亜興学小筌』、『諳厄利亜語林大成』の編纂者である本木正栄とは昵懇であり、正栄からの影響は十分に考えられるからである。

なお、『厚生新編』は1811年から1846年にかけて翻訳された西洋百科事典であったが、ついに未定稿のまま出版されることがなかった。それ故に、当時この書物が多くの読者を得て、その語彙が広く伝播したとは

言えないのである。ただし、既に触れたように大槻玄沢、宇田川玄真や後に述べるように青地林宗、宇田川榕庵ら蘭学者が編纂に加わっており¹⁵、語彙としてその流れを汲む蘭学者の間で継承されたことは十分に考えられるのである。

次に「蒸気」の用例は、青地林宗がオランダ語のJohnnes, Buys『Natuurkundig』を主な文献として訳述した、日本最初の物理学書『気海観瀾』（1827年）に見える。その用例を挙げると、同書「雲」の項には、

雲の海陸の発する所の蒸気なり。……高山に登る者、雲中に入れば、衣滞の水滴を見る。是れ雲と霧と同じく水蒸気の気中に懸かるものと為す¹⁶。

とある。ここでは、「蒸気」のみならず、「水蒸気」の語も見えるが、いずれも水蒸気の意味で、気象学（物理学の一部門）の用語として用いられている。

林宗は、『厚生新編』の翻訳にも従事していた¹⁷ので、その「21 蒸湯バット」又「ストーフ」の項から、「蒸気」を訳語として採用した可能性があるが、「本木永良、中野柳圃（志筑忠雄と同一人物）によって開発された物理方面の訳語は、まず馬場佐十郎に師事した青地林宗（芳訃、盈、1775～1833）の『気海観瀾』で公開される¹⁸との指摘があるように、この「蒸気」を含め『気海観瀾』の訳語は、直接は師匠馬場左十郎より受け継いだものとするのが妥当であろう。更に遡れば大師匠に当たる本木永良、中野柳圃からの継承でもあるはずである。なお日本初の物理学書である『気海観瀾』は「かなりよく流布され、江戸時代末期における究理（筆者注：今で言う物理学）の教科書として重宝がられたものである¹⁹と言われるように、影響力が大きく、この「蒸気」も含めて、その訳語も後に受け継がれたと見てよい。

青地林宗の女婿、川本幸民が『気海観瀾』を注釈、増補した、『気海観瀾広義』（1851～1858年）にも、林宗が用いた訳語「蒸気」が見え、同様に「水蒸気」も見える。

水は蒸気となるときは、其睿六百五十七倍し、……蒸気の張力は火薬に比するに、四百三十五倍す。……○水蒸気は大に温を含めむ性あり。（巻七、「流体総論」「水」）

水蒸騰して雲になるの理を知らむと欲せば、前の水蒸気及び煮沸、蒸気、寒に遇えば農凝す。……水蒸気の融化する者、温を失へば雲となり、益々これを失へば、雨となる（巻十二、「前篇餘義」）²⁰

林宗の『気海観瀾』を増補したという、この書物の性格からいっても、この「蒸気」、「水蒸気」という訳語は言うまでもなく、岳父青地林宗からの継承である。この書の刊行された頃には、訳語「蒸気」は、文明の利器である「蒸気船」や「蒸気車」の訳語の一部にも利用され、定着したのである。

また、青地林宗の『気海観瀾』より、十年あまり遅れて刊行された、日本初の本格的化学書である宇田川榕菴編訳『舎密開宗』内、外篇（内篇第一編1837年、第二、三編1838年、第四編1839年、第五、六編は刊行年不明、外篇卷一、二、三 1847年）にも「蒸気」が使われている。

流体、温素ニ遇バ湯トナリ氤氳トシテ気化ス之ヲ炊気即チ蒸気ト云
（「内篇」第一編 蒸気之温度 第二十五章）

烙鏡上ニ烘レバ結晶水、蒸気ト為リ飛散シテ白粉ニ化ス
（「内篇」第二編 硫酸曹達 第九十四章）

二物純精ナル者和スレバ熾熱ヲ起シテ膨張シ紅烟ヲ発シ水蒸気、窒素瓦斯、塩酸ヲ生ズ

（「内篇」第二編 酸化塩酸譜摸尼亞【アンモニア】 第二百七章）²¹

ここで使われている「蒸気」はその二つの意味、①物質の気体の状態。液体または固体から蒸発または昇華によって発生した気体、②すいじょうき（水蒸気＝水が蒸発してできた気体）の略で使われている。

『舎密開宗』が明治以前の日本において、化学はもちろんその応用部門である、医学、薬学等に及ぼした影響は計り知れず、よってこの書物に登場する訳語は多くの場合、これ以後の科学書に受け継がれており²²、「蒸気」の普及、定着に寄与したことは予想に難くない。

以上のように、「蒸気」の用例を、初出の『形影夜話』から、『気海観瀾』、『舎密開宗』を経て、『気海観瀾広義』まで見てきた。これらの用例から、「蒸気」の誕生から普及、定着に至る過程の大要を見ることができたと思う。

さて、これまで、「蒸気」の用例を蘭和辞書については見てこなかった。それには理由がある。蘭和辞書が訳語「蒸気」の誕生に関わりがなく、「蒸気」の一部の意味である、「水蒸気」について、普及の功を認めうるに過ぎないからである。

それでは、代表的四種の蘭和辞書について、「蒸気」の用例を見ていくことにする。

本格的な蘭和辞書は、まず江戸後期に江戸と長崎で、同じ『F. ハルマ蘭仏辞典』を藍本としてそれぞれ別に編纂された。その内、先に刊行された稲村三伯編『波留麻和解（通称江戸ハルマ）』（1796年）には、オランダ語「damp=英語の【damp（湿気、湿り、湿度、もや、霧、水蒸気）】」の訳語として、「烟」をあて、オランダ語「stoom=英語の【steam（水蒸気、動力・加熱などに用いる蒸気、スチーム、湯気、霧、もや）】」の訳語として、「烟霧」をあてており、訳語として「蒸気」はない²³。それから江戸ハルマ系の藤林普山編『訳鍵』（1810年）には、「damp」の訳語として、「烟霧」をあて、「stoom」の訳語として「湯気、

烟霧」をあて、これにも訳語として「蒸気」はない²⁴。

更に『波留麻和解』に遅れること37年後に刊行された、ヘンドリック・ヅーフ編『道訳法児馬（通称長崎ハルマ）』（1833年）では、「damp」の訳語として、「蒸気」をあて、「stoom」は項目としてはあるが、それに対する訳語がない²⁵。更に長崎ハルマ系の桂川甫周編『和蘭字彙』（1855～1858年）は「damp」の訳語として、「蒸気」をあてるのみで長崎ハルマと全く同じである²⁶。両辞書とも訳語として「蒸気」はあるが、その登場の時期は『気海観瀾』より遅く、訳語「蒸気」の普及、定着という面からは一定の貢献はしたであろうが、「stoom = steam」の訳語としての「蒸気」がなく、「蒸気」の普及・定着に決定的な意味を持ったとは言い難い。

以上のように見てくると、蘭和辞書は「蒸気」の誕生に影響を与えたとは考えられない。ただ「蒸気」の一部の意味である、「水蒸気」については普及の功を認めうるに過ぎないのである。

それでは、来華宣教師編纂の英華辞書は「蒸気」誕生やその定着に対してその影響はどうであったのか。結論から先に言えば、これらは「蒸気」の誕生、定着に影響は全くなかったと言えよう。

当時影響力の大きかった、モリソン、メドハースト、ロプシャイトの英華辞書を調べてみると、「蒸気」の意味に該当する「damp」、「steam」、「vapor」に対する訳語に「蒸気」がないのである。以下、方言的語や異体字を除いて、この3種の英華辞書のそれらの訳語を示す。

モリソン (Morrison) 『DICTIONARY of the CHINESE LANGUAGE』第6巻 (『ENGLISH AND CHINESE』、1822年) では

DAMP 湿 潮湿

STEAM arising from boiling water, 水蒸 炊気 滾水出之気

VAPOUR from water 水気²⁷

メドハースト (Medhurst) の『ENGLISH AND CHINESE DICTIONARY (英華字典)』(1847～48年)では、

Damp 湿 潮湿

Steam 蒸 氣 炊氣

Vapur 氣 水氣 霧 烟霧 霏 霞²⁸

ロプシャイト (Lobscheid) 『英華字典』(1869年)では、

damp moist humid 潮 湿 潮湿 霑湿 湿氣 沾氣 霧 烟霧
霞

steam n 水氣 汽

vapor 氣 气²⁹

とある。

いずれの辞書にも訳語として「蒸気」がないのだから、「蒸気」の誕生、定着には全く関係がない。

さて、1850年代になると、日本に当時最先端の文明の利器である、「steam-carriage」や「steam boat」乃至「steam ship」の情報やその実物、模型などが入ってくる。その時、「steam」の訳語に「蒸気」が使われ、前者が「蒸気車」、後者が「蒸気船」と訳されたのであった³⁰。このことは翻訳語「蒸気」が定着したことを示しているのである。

それ以後、日本人が編纂した最初の本格的英和辞典、堀達之助編『英和对訳袖珍辞書』(1862年、復刻版、秀山社発行、1988年)では、「steam」の訳語は「蒸気」であり、「vapour」の訳語も「蒸気」であり、「steam-boat」の訳は「蒸気船」である³¹。また、最初の本格的和英辞典である、ヘボン編『和英語林集成』では、初版、再版、3版とも、「蒸気」が「steam」の訳語として採用され³²、また明治期に編纂された代表的な国語辞書である、大槻文彦編『言海』(1890年)、山田美妙編『日本大辞書』(1893年)にも、「蒸気」の項目があり³³、以上のように幕末、

明治以降翻訳語「蒸気」は言葉として不動のものとなっていくのである。

3. 漢訳洋書における「蒸気」

最後に、漢訳洋書に登場する「蒸気」について、簡潔に述べたい。

最初に漢訳洋書の訳語として、「蒸気」が登場したのは、合信（ホブソン）が編纂した理科教科書『博物新編』（1855年）第一集である。但し表記は「蒸汽」である。

まず、目次の次にある挿絵に「蒸汽法」があり、フラスコの中の水を熱し、蒸気を作り、それを冷やして、水に戻す実験をする装置が図示されている。本文の「熱論」には「蒸汽論」という項目があり、その中に、

故西人用火蒸水、節取其汽、以代人力。³¹

とあり、この「蒸汽」は、「汽ヲ蒸ス」であり、「蒸気」のことではないことは明らかである。つまり、名詞としての「蒸気」ではない。

次に丁隴良（マーチン）『格物入門』（1868年）では、第二巻「気学」、「中章 論蒸気」に、

問、何為蒸気、答乃煮水滾沸化出之汽也。

問、与水気何別、答、水不熱而化為氣、謂之水氣、極熱而化為氣、謂之蒸気。³⁵

とあり、この「蒸気」は水蒸気のうち、人工的に水を急激に熱してできた気体である。この書物では、一般の水蒸気、すなわち自然に蒸発してできる水蒸気は「水気」として区別されている。

次に韋廉臣（ウイリアムソン）『格物探原』（1876年）首巻の「論水」の中に、

仮如洋海或再减小、其蒸気必少、雨露亦少。³⁶

とあり、この「蒸気」は『格物入門』で、「水気」と呼ばれていたもの、即ち自然現象として、水が蒸発してできた気体、即ち水蒸気のことであ

る。

これら訳語「蒸気」は日本で作られた訳語「蒸気」が中国に伝わったものなのであろうか。可能性としては、日本の蘭学書が中国に入り、宣教師たちが読むこと、また、『英和对訳袖珍辞書』などが宣教師の目に触れたことも考えられようが、宣教師の科学知識の水準から見て、はるかに水準の低い蘭学書を宣教師がわざわざ手に入れて見ることはまず考えられないし、また、日本人の編纂した英和辞書をわざわざ手に入れ目にすることも同様に考えられない。日本製近代訳語は一般に20世紀初頭の留学生によって中国に伝播されたのであり、また「蒸気」を「steam」の訳語として載せた、ロプシャイト系英華辞書の一部の辞書（日本在住の華僑馮鏡如 [F. Kingsell] の増補した『A Dictionary of the English and Chinese Language, with Merchant and Mandarin Pronunciation』、1897年）が出版されたのはこれらの書物の刊行後のことであるから、この「蒸気」は日本の訳語「蒸気」が伝わったものとは考えられない。なお、既に第2章で述べたが、明末清初の来華宣教師の残した科学系の漢訳洋書にも「蒸気」はない。中国での訳語「蒸気」は、『博物新編』の動詞+目的語の「蒸汽」あたりから発想を得て、宣教師が独自に名詞として新たに作りだしたという、可能性が高いのではなかろうか。もちろんその普及は日本製訳語「蒸気」の流入によると考えるのが妥当である。

4. 小結

以上のことから、近代訳語「蒸気」は、西洋科学、特に物理学、化学のテクニカルタームとして、19世紀初頭に、既存の漢語「蒸気」を借用して杉田玄白ら蘭学者の手によって日本で誕生し、その後、蘭学者、洋学者の物理学、化学の書物に使用され、今日使われている意味で定着していったのではなかろうか。訳語「蒸気」の誕生、定着について、蘭和

辞書はほとんど貢献することがなく、ましてや来華宣教師の編纂による、英華・華英辞書及び漢訳洋書は全く関与しなかったのである。

なお本稿は言語文化研究所平成16年度個人研究、17年度共同研究のおそまきながらの成果である。

注

- 1 『日本国語大辞典第二版』（小学館、2001年）第7巻、第69頁「蒸気」の項に拠る。
- 2 同上。
- 3 『洋学 上』（日本思想大系64、岩波書店、1972年）第263頁の注に拠る。
- 4 西洋近代科学において、数学、天文学に比べ、物理学、就中気象学、化学が学問的に集大成されるのは遅い。そのため、明末清初来華した宣教師たちが伝来した科学は主に数学、天文学であり、彼らが漢文で翻訳したり、まとめたりした、科学分野の書物は『幾何原本』、『天問略』、『同文算指』、『崇禎曆書』など天文、暦算が大半であるため、その中に「蒸気」のような気象学、化学の語彙を探しても探し当てる可能性は低い。筆者は実際に吉田忠編『イエズス会士関係著訳書の基礎的研究 科学研究費補助金研究報告書』に基づき、その著訳書にあたって、「蒸気」の用例を探したが、その用例はなく、ほとんどむなしい作業であった。また、日本の蘭学は医学、天文学（暦の編纂のため）から始まり、その領域を周辺に拡大していったため、蘭学の初期の書物には「蒸気」の語彙が出てくる可能性が低い。実際に蘭学以前に存在した南蛮科学の書物や初期蘭学の書物、たとえば、『乾坤辨説』（『文明源流叢書』第二、国書

- 刊行会、1922年)や『曆象新書』(『文明源流叢書』第二)などにもあたって、「蒸気」の用例を調べたが、その用例は皆無であった。
- 5 『大漢和辞典』(修訂第二版)第九卷第833頁(大修館書店、1989年)、『漢語大詞典』第9卷第531頁(漢語大詞典出版社、1992年)。
 - 6 本文は『漢文大系 淮南子 孔子家語』(富山房、1977年)に拠る。また、解釈は、楠山春樹『新釈漢文大系 淮南子 中』(明治書院、1982年)第456頁、戸川芳郎・飯倉昭平『中国古典文学大系 淮南子・説苑(抄)』(平凡社、1974年)第111頁の解釈に拠る。
 - 7 『洋学 上』(日本思想大系64、岩波書店、1972年)第263頁注。
 - 8 片桐一男『杉田玄白』(『人物叢書』、吉川弘文館、1971年)第20頁。吉田忠「蘭学と近代科学」(『日中文化交流史叢書 8 科学技術』、大修館書店、1998年)第239～241頁。
 - 9 長澤規矩也著『和刻本漢籍分類目録』(汲古書院、1976年)第132頁。
 - 10 『諳厄利亜興学小筌』(1811年)は長崎市立博物館所蔵の本木正栄自筆草稿本の影印本(大修館書店、1982年)に拠る。
 - 11 『諳厄利亜語林大成』(1814年)は長崎市立博物館所蔵の草稿本の影印本(大修館書店、1982年)に拠る。卷之四 ED之部、卷之十二 S之部、卷之十四 V之部。
 - 12 井田好治「長崎本『諳厄利亜興学小筌』の考察」、「長崎本『諳厄利亜語林大成』の考察」(『長崎原本『諳厄利亜興学小筌』『諳厄利亜語林大成』の解説と研究』、大修館書店、1982年)。
 - 13 『江戸時代西洋百科事典——『厚生新編』の研究』(杉本つとむ編著、雄山閣書店、1998年)の「翻刻編」第229頁。
 - 14 前掲書第602頁「項目別翻訳文と訳稿収録箇所一覧」と前掲書第59頁「B『厚生新編』〈B稿〉構成・内容・訳、校者・翻訳時期一覧」。
 - 15 『気海観瀾』(『日本科学古典全書』第6巻、朝日新聞社、1978年)

- の解説（三枝博音執筆）第5頁。
- 16 前掲書第39頁。
 - 17 前掲書の解説（三枝博音執筆）第5頁。
 - 18 杉本つとむ『増訂日本翻訳語史の研究』（杉本つとむ著作選集4、八坂書房、1998年）第4章第111頁。
 - 19 日本学士院『明治前日本物理化学史』（学術振興会、1964年）第122頁。
 - 20 『気海観瀾広義』（『日本科学古典全書』第6巻）第197頁、第273頁。
 - 21 『舎密開宗（復刻版と現代語訳）』（講談社、1975年）第32頁、第113頁、第150頁。
 - 22 『明治前日本物理化学史』第320、321頁。
 - 23 『波留麻和解』（東京大学総合図書館所蔵本影印、『近世蘭語学資料』第1期、ゆまに書房、1997年）第2巻第50頁、第7巻第371頁。
 - 24 『訳鍵』（国立国会図書館所蔵本影印、『蘭学資料叢書5』、青史社、1981年）。
 - 25 『道訳法児馬（長崎ハルマ）』（静嘉堂文庫所蔵本影印、『近世蘭語学資料』第3期、ゆまに書房、1998年）第53頁、第931頁。
 - 26 『和蘭字彙』（早稲田大学図書館所蔵本影印、早稲田大学出版会、1974年）第519頁、第2848頁。
 - 27 モリソン(Morrison)『DICTIONARY of the CHINESE LANGUAGE』第6巻（『ENGLISH AND CHINESE』）（早稲田大学図書館所蔵本影印、ゆまに書房、1996年）第104頁、第409頁、第454頁。
 - 28 メドハースト(Medhurst)『ENGLISH AND CHINESE DICTIONARY（英華字典）』（東洋文庫所蔵本）VOL I 第358頁、VOL II 第1222頁、第1361、1362頁。
 - 29 ロプシャイト(Lobscheid)『英華字典』（千和勢出版部、東京美華

- 書院、1996年）第555頁、第1672頁、第1909頁。
- 30 1850年代前後の「蒸気船」、「蒸気車」の用例を挙げると、以下のようになる。
- 「按ズルニ此飛脚船、蛮名「ストームホート」ト云フ。蒸気船ト訳ス。唐人ハ躉船ノ名ヲ命セリ。此船ハ英吉利人近来ノ工夫ニテ、新製スル処ノ由、……。」（大概盤溪録『呂宋国漂流記』、東京大学東洋文化研究所蔵稿本、1845年）
- 「今朝高処に登り賊船之様子相窺候処、四艘 二艘は蒸気船」（1853年、「吉田松陰、道家戌助宛書簡」、『吉田松陰全集』第8巻【岩波書店、1939年】第170頁）
- 「水蒸気は……蒸気船を見て其猛勢あること察すべし」（1851年、川本幸民、『気海観瀾広義』巻三、「三態」）
- 「蒸気車 ストームワーゲン 第五版ノ二図ハ蒸気車ヲ直径ニ切断シテ（甲甲）ハ火竈 {火室} ナリ」（1854年、川本幸民『遠西奇器述』[『エレキテル全書 遠西奇器述 究理原 和蘭奇器』、恒和出版、1978年]）
- 「蒸気車をシッホク台の上にて、回しめせたり」（1854年、川路聖謨『幕末外国関係文書付録之一』[『大日本古文書』]）
- 「竹橋御蔵池において蒸気車組立火入相試候様仕度」（1854年、江川英龍、『江川坦庵全集』下巻 復刻版、巖南堂書店、1979年）
- 31 堀達之助『英和对訳袖珍辞書』（復刻版、秀山社発行、1988年）第780頁。
- 32 飛田良文、李漢燮編『『和英語林集成』初版再版三版対照索引』、港の人、2000年）第一巻第417頁。
- 33 『言海』第三冊第505頁（『明治期国語辞書大成』普通辞書5、大空社、1998年）、『日本大辞書』（『明治期国語辞書大成』普通辞書6、

大空社、1998年) 第892頁。

- 34 合信(ホブソン)『博物新編』は明治5年刊の和刻本「福田氏蔵梓」に拠る。杉井六郎「江蘇上海墨海書館蔵版『博物新編』とその翻刻」(『史窓』第48号、1991年)によれば、上海墨海書館版と和刻本の間本文に異同はない。
- 35 丁隴良(マーチン)『格物入門』、京都同文館、1968年(国会図書館蔵本)
- 36 韋廉臣(ウイリアムソン)『格物探原』、1876年(国会図書館蔵本)